

ブロンテ姉妹に見る愛の表現

宮川下枝

Brontë 姉妹それぞれがその主題として用いた愛の表現の仕方を追ってみるのも興味ある研究だと考える。

もともとアイルランド系の血を引くこのブロンテ姉妹は共に勝れた頭腦の持ち主であり、父より受け継いだ文学的才能の故に、書くことは苦にできなかったが、自分達を書いたものを出版するにあたっては並々ならぬ苦勞をしている。女性的身にして自分達だけで片田舎の Haworth から原稿を送って書物にして貰う為には出版社の手を転々と経なければならず、たとえ如何に抱負を抱き、希望に燃え、確心に満ちた彼等としても出版とは至難^{ワザ}の業であった。如何なる苦難にも落胆することのない底力溢れるこの姉妹の勇敢な魂は驚嘆に値する。遂に世に出た彼等の処女出版 *The Brontë Poems* も僅か三冊しか売れなかったという惨めさにも、彼等は絶望することもなかったという。

更に、小説を書いて真価を世に問うことにした彼等であるから、その底力の程や測り知られぬものがある。こうして世に出た三人の小説“*Professor*”—姉 Charlotte Brontë, “*Wuthering Heights*”—Emily Brontë, “*Agnes Grey*”—Anne Brontë の出版の過程などは既に世に知られた事実であるから、くどくどと述べるにはあたらないであろう。只、この性格的にはそれぞれ個性があったとしても同じ牧師館に一生を過した三姉妹の中には幾多の共通点もあり又共通の思想もある。だがそのテーマとした愛の表わし方にはどのような差異があるか、今回は考えてみたいと思うのである。

もともとこの姉妹たちには、ものを書くのに机は必要では無かったようである。エミリーがもの書きをしている様などは、ベッドの側の椅子に腰

を下ろしてその膝で書いているのが彼女の日記の絵などだろうか。ベッドの上には愛犬キーパーが長々と寝そべっている。又暑い折には三人とも庭にテーブルを持ち出して、その上で書いたと言われている。Museumの看板となっているのはスカートを拵けて、エミリーが机に向かって何かを書いている姿であるが、あのような仰々しいものではなかったようである。もの書きと思われるのを嫌ったジェーン・オースチンと同様、ブロンテ姉妹も女性作家と見なされるのを嫌ったようである。姉シャーロットがアドバイスを求めた Thackeray からは「作家は女性の仕事ではありません。又成ってはいけません」との苛酷な返事を得ている。シャーロットが作家の序説という中に於いて述べている如く、

We had a vague impression that authoresses are liable to be looked on with prejudice. We had noticed how critics sometimes use for their chastisement the weapon of personality, and for their reward, a flattery, which is not true praise.⁽¹⁾

女性作家というものは避見をもって見られ勝ちだとの漠然たる考えを持ち女性だと見て、安易な讃詞を贈られるのも、又反対に不相応の厳しい批判を受けるのも嫌ったようである。

愛の表現

1) シャーロット・ブロンテ

シャーロットの作品に於いて切々と読者の胸を打つものは、彼女自身の深い経験から滲み出たものであり、悲しみに溢れたものであるだけに、たとえ妹エミリーの描く愛が如何に激しいものであったにしろ、理想に燃えるものであったにしろ、それは到底姉シャーロットの真実味には及びもつかないものである。ブラッセルでの経験、愛の受け入れられぬ嘆き、愛を捨てる痛い迄の決心は、その作品、*Shirley* に於いても *Jane Eyre* に描かれたものとしても、見事に表現されている。シャーロット自身も自分は経験しないことは、感情にしても、環境にしても、一行たりとも書かないの

だというが、事実その通りである。

Details, situations which I do not understand and cannot personally inspect, I would not for the world meddle with.⁽²⁾

(詳細にしろ、環境にしろ、私は自分で理解出来ないものは書かないし、自分自ら視察したものでなければ扱おうとは絶対に思わない。)

先ず *Shirley* の中に出る *Caroline* の気持の描写から見てみよう。

そもそもこの『シャーリー』なる作品は1949年シャーロットが敬愛する妹エミリーを失い、続いて可愛い、末の妹アンを失って非常な傷心のうちに手がけたものであるが、*desolate* と自分の心を描写しているが、それこそ何事にも手を付ける力の湧かなかった頃であった。だが自分の最初の作品 *Professor* の不評にもめげず、父の眼の病の手術の病床の側でその看護をし乍ら、*Jane Eyre* を書き上げたシャーロットはこの場合も挫折しではなかった。やがて勇気を取り戻すと書きかけのシャーリーを続行して行った。愛する妹達二人を主人公 *Shirley*, *Caroline* に仕立てたこの小説への熱の入れようは大したものであった。そして後半には二人とも愛を夢のようなロマンスで終わらせているがこれはシャーロット自身が自分の夢を小説の中で結実させ、悲しみを忘れ去ったのであろうが、迫力ある描写は矢張り前半であろう。

話の筋としてはシャーロットにしては珍しく織物工場の襲撃という歴史を取り扱った社会小説として書き出したものであったが、書くうちに女主人公、シャーリーとキャロラインの愛にのめりこんで行った。シャーリーは小説に出てくるフィールドヘッドの大地主の娘で、聡明で気の強い女性で、エミリーが生きていて、もっと尊い身分に生れついていたとしたらかくもあったらうかという姿を想像して、シャーロットは書いてみたと言っている。キャロラインは小説の中ではその地の牧師 *Helstone* 氏の姪にあたり、心やさしい控え目な内気な女性として描写されているが、妹アンを表現したものだと言われ、又シャーロットの親友エレン・ナッシーそのものだとも言われている。

Caroline Helstone is often said to be a portrait of Miss Ellen Nussey,

but this is true only of external aspect: the inner life depicted is undoubtedly that of Charlotte Brontë.⁽³⁾

(キャロライン・ヘルストンはエレンナッツイ嬢生き写しだと屢々言われているが、これは外観だけのことで、その心情たるやシャーロットそのものである)と、Mac. Kay も述べる通り、愛の悲しみはシャーロットそのものである。

このキャロラインは両親のない少女で叔父ヘルストン牧師の養女として恵まれた静かな環境の中に育っている。時々ロバートといういここにあたる青年の家に遊びに行く、このロバートというのがこの小説の主人公で遅しい織物工場主で後に暴徒にも敢然として立ち向うのであるが、叔父はこの青年とは意見を異にしている為、キャロラインがこの青年と親しくすることには不賛成である。只青年の姉のもとに料理、家事を習いに行くのなら許してくれる。したがってこの秘かな慕わしい思いも叔父の忠告によりキャロラインは諦めねばならない。切々とした悲しみはシャーロットの身を以って経験したものだけに切実な訴えを持っている。シャーロットが乗り移ったかに見える表現である。

“When thus prostrate, temptations besieged her: weak suggestions whispered in her weary heart to write to Robert, and say that she was unhappy because she was forbidden to see him and Hortense, and that she feared he would withdraw her friendship from her, and forget her entirely, and begging him to remember her, and sometimes to write to her. One or two such letters she actually indicted, but she never sent them: shame and good sense forbade.⁽⁴⁾

(こんな風に、打ちのめされると、彼女は誘惑に駆り立てられ、心弱い誘いの言葉が彼女の物憂い心に囁かれる。ロバートに手紙を書いて、あなたとオルスタンスに逢うことを禁ぜられたから悲しくてなりません。あなたは友情を引込めて私をすっかりお忘れになりはしなかったでしょうかと言い、私の事を思い出して、手紙を下さい、と嘆願したくなるのだ。こんな手紙を実際一、二通は書いてみた。しかし出しはしなかった。恥しさと良識がそれをさせない。) 熱意をこめて書いたシャーロットのエジェ氏に

対する手紙には相手からは何の返答も来なかった。

又別の表現をみよう。忘れ去らねばならぬ苦しみは溢れ出ている。

She said she did this to tire herself well, that she might sleep soundly at night. But if that was her aim it was unattained, for at night, when others slumbered, she was tossing on her pillow, or sitting at the foot of her couch in the darkness, forgetful, apparently, of the necessity of seeking repose.⁽⁵⁾

(身体を疲らせて、夜熟睡することが出来るようにするのだと彼女は言う。しかしそれが目的なら、何の役にも立たなかったことになる。他の者がみんな眠っている時、彼女は枕の上で輾転反側するか、でなければ休息を求めることの必要を忘れてしまったかのように闇の中でベッドの足許に坐りこんでいるからだ。)

Often unhappy girl, she was crying, crying in a sort of intolerable despair, which, when it rushed over her, smote down her strength, and reduced her to childlike helplessness.⁽⁶⁾

(堪え難い絶望のうちに、不幸な少女として彼女は屢々声をあげて泣いた。その悲しみが打ち寄せると力も打ち砕かれ、無力な子供のようになってしまった。)

堪え難い孤独にさいなまされ、絶望感に打ちひしがれた力の抜けきったシャーロット自身がよく表現されている。

Love, when he comes wandering like a lost angel to our door, is at once admitted, welcomed, embraced: his quiver is not seen if his arrows penetrate, their wound is like a thrill of new life: there are no beech's hand can extract that perilous passion—an agony ever in some of its phases with many, an agony throughout is believed to be an unqualified good,⁽⁷⁾

(愛というものが我々の戸口の前に迷い子の天使のように佇むと、我々はすぐに戸をあけて抱擁してしまふ。彼の震えなんかには気がつかない、その恋の激しい矢に射られても、その受けた傷は新しい人生の刺激であるかのような気さえしてしまう。その危険な情熱をとりのぞく手は何もないし、多くの愛する人々の直面する苦悩・常に伴う苦悩はこの上もなく素晴

いいことだと考えられ信じられている。)

愛の苦悩を味い尽したシャーロットにして始めて、こうした文の書けるものであろう。彼女の示す愛の表現は誠に強くその詩にもある如く（私はあなたの側に居れば怯えることもない。私のあなたに対する愛のように、たゆまぬ愛よ。）と表現する。

I could not tremble at thy side,
And strenuous love—like mine for three—⁽⁸⁾

更に Mac Kay の述べる如く、

incessant tendency to describe the need of being loved.⁽⁹⁾

（絶えず愛される必要性を描こうとする傾向があり）又、深い真剣な愛を物語りその愛は報われることがない為に悲惨であり、又その報いらぬ愛を描くに当たってはシャーロットに匹敵するものは居ない。外の作家ではとても描けるものではない。

It was hers to depict love in its deeper, more tragic, more serious moods and aspects. She could give us with a spell such as few others can command—witness the passage.....

The pain of unrequited affection is the feeling she never tires of depicting, and in describing this she has no equal.⁽¹⁰⁾

この返えされることない愛を描くに当たっては彼女は飽くことなく描きつづけている。

2) エミリー・ブロンテ

エミリーの愛の精神に就いては、Winifred Gerin がはっきり表明しているからそれを引用してみたい。

The scorn with which Emily spoke of 'love' of lovers's infirm and shallow conduct towards those they professed to love— could not have been so withering if she had not felt its total inadequacy in comparison with the ideal her early and intoxicating reading of the poets had set before her. Anything less than a Byronic passion or a Satanic one must appear con-

temptible in her eyes. . (11)

(世の中の恋人達の愛というものをエミリーは実に軽蔑の念をもって眺めていた。「愛している」と公言し乍らもその相手に対しての確信のない浅薄な行為については。昔の詩人達の心惹かれる詩をよんでそれを理想とした彼女は、そう言った愛に比べて現実の恋人たちの愛は何と劣るものと迄は思わないにしても、それ程つまらないものはなかった。バイロンの詩の中に見られる情熱、即ち悪魔的な迄の愛情以外は彼女には馬鹿らしく思えたのであった。)

故に彼女はその詩に於いてもこの世の愛なんて、何とも思わないとうたっている。

Riches I hold in light esteem
And love I laugh to scorn
And lust of Fame was but a dream
That vanished with the morn. (12)

(富なんて私は軽く見ない。
愛なども私は軽蔑する。
名誉のさびついた憧れなんて夢に過ぎぬ
朝になればみな消えてしまうものだ。)

With a human love replacing the divine, Emily pursued in the novel the theme of spiritual union that can be made to triumph over the divisions of physical existence. (13)

(人間の愛を神聖なものと置き替えて、エミリーは小説の中に於いて、精神的な結合というものをテーマとして追求していった。それは肉体は離れていても精神的に結ばれる愛である。)

faith in the reunion of parted spirits is essential to the plot. (14)

(死んだ魂の再結合に対する信念が話の筋に重要なものである。)

While the theme of alienation as the source of all unhappiness in life runs through Emily's earlier poems so the sense of healing by atonment is present in the maturer poems and provide the climax of *Wuthering Heights*. (15)

(エミリーの初期の詩に見られるものは、あらゆる人生の不幸の根源は疎外されることであるというものであったが、成熟してからの詩には償いによって回復してゆくという考え方があらわれ、『嵐ヶ丘』に至ってその考えは頂点に達している。)

The dread of losing the assured beauty of the earth and joy of living in it in exchange for a doubtful immortality was a very real fear that Emily had faced more than once in her poems.⁽¹⁶⁾

(この地上で確保した美を失うおそれ、その中に住むよろこびを失うという恐怖、そして交換に永遠の生命を得られるかどうかという疑いは、エミリーがその詩の中で一度ならず直面した心からの恐怖であった。)

The loves of Catherine Earnshaw and Heathcliff are but the allegory of such a spiritual passion. *Wuthering Heights* was an exploration and a proclamation of the truth toward which Emily had been reaching for years.⁽¹⁷⁾

(故にキャサリン、アーンショーとヒーフクリフの愛はこのような精神的な情熱を具体化する寓話に過ぎない。『嵐ヶ丘』というのはエミリーが何年もかかって到達した真理への探究、宣言でもあった。)

と Gerin は説くのである。そしてエミリーの精神的向上は著しいものであり、自分の生命に対しても不死身の確固たるものを確信したのであると述べている。

By 1846, on 2 January, she had discovered, as she believed, that the life within her was invulnerable, not to be touched by Time or alternation, indestructible even by death.⁽¹⁸⁾

(1846年1月2日迄には彼女は自分が信じていた如く内なる生命は不滅であり、時によっても変ることなく、交替によっても変る事なく、死でさえもそれを滅ぼすことは出来ないということを見つけていた。)

キャサリンとヒーフクリフがあのように愛し乍らも何故結婚しなかったかという疑問は多くの人が持ち、色々に解釈をつけてゆくのであるが、この Gerin の説をふまえて読んでみると、理解し易くなるであろう。

「自分で経験したものでなければ一筆たりとも書かない」と言う姉シャ

ーロットと異り、恋の経験のないエミリーは思いのままに想像の翼を伸ばしてゆく。その愛は地上の肉体を離れ空かけめぐりものであるが、天上に於いてこそ魂は結ばれるのであるとの確固たる信念は、二人の愛をこの世ばなれしたもの乍らも強固なものにしているのである。心に深く愛し乍らもキャサリンは、この世の富、名声を慕ってエドガー・リントンと結婚する。而も三年間蒸発していたヒースクリフが帰ってくれば、それを我が事のように喜び、彼をも心から愛している。一般の人には如何にも奇妙な心情であるが Melvin R. Watson は論文 *Tempest in the Soul: The Theme and Sctructure of Wuthering Heights* で次のように説明している。

...she loved both Edgar and Heathcliff—in entirely different ways, she was faithful to her marriage vows, but they could not prevent her feeling a spiritual kinship with Heathcliff. The love scene in chapter XV overpowering as it is, conatains nothing gross, nothing merely physical. It is symbolic of a union which the two cannot resist, for it expresses a likeness of the souls.⁽¹⁹⁾

(彼女はエドガーもヒースクリフも愛したが、全く異った愛し方だった。彼女は結婚の誓約に対しては忠実であったのであるが、ヒースクリフに対しては、精神的な血のつづいた感情を抑えることは出来なかった。十五章に於ける愛の場面は強烈なものではあるが、醜悪な肉感的なものを感じることは出来ない。それは似かよった二つの魂を表明しているが故に抵抗することの出来ない二人の結合を象徴するものである。)

ここに於いて、He is always in my mind. (彼は何時だって私の心の中にいるのよ。)と確信に溢れて叫ぶ有名な愛の信念を引用しておかねばなるまい。『嵐ヶ丘』第九章に於けるキャサリンの言葉である。

My great miseries in this world have been Heathcliff's miseries, and I watched and felt each from the beginning. My great thought in living is himself. If all else perished, and he remained, I should still continue to be. and if all else remained, and he were annihilated, the universe would turn to a mighty stranger. I should not seem a part of it. My love for Linton is like the foliage in the woods, time will change it. I'm well aware, as winter changes the trees. My love for Heathcliff resembles the eternal

rocks beneath; a source of little visible delight, but necessary. Nelly, I am Heathcliff.⁽²⁰⁾

(この世であたしの大きな苦しみは、そっくりそのままヒースクリフの苦しみだったし、あたしは初めから両方の苦しみを見つめ感じて来たわ。——人生でのあたしの大きな関心は彼だったの。ほかのいっさいが減びてしまっても彼さえ残っていれば、あたしは存在し続けるし、ほかのいっさいが残っていても彼が消えてしまえば、この宇宙は白けた他人行儀のところになって、あたしがその一部だという気はしないとと思うの。エドガーに対するあたしの愛情は、森の木の葉みたいなもので、冬が来れば木のたたずまいが変わるように時がたてば変わることはよくわかっているの。だけどヒースクリフへの愛情は地底に永遠に眠る巖に似て、目を楽しませることは少なくとも、どうしてもなくてはならないものなの。ネリー、わたしはヒースクリフなのよ。!)

「私一人では死ねないわ。」と絶叫して死んでいったキャサリンは18年間もの長い間、亡霊となってヒースクリフを悩まし続けるのであるが、それによく耐え、彼女の魂と合体出来ることを望みつつ死んでゆくヒースクリフを描くところにも、エミリーの強い信念はうかがえる。

Union with Cathy is his one desire. since physical union is made impossible by her death, the union must as spiritual.⁽²¹⁾

(ヒースクリフの唯一つの願いは、キャサリンと一体となれることであるが、肉体上の結合は既にキャサリンの死んでる以上不可能であれば、魂の結合しか道はないのである。)

エミリーは副牧師などに対して心秘かに思った人はあったかも知れない。だが自分の思いは人に話さぬ人であり、手紙も日記も僅かばかりしか残さなかった人で、明白な事実は知られていない。周囲と言っても極くせまい周囲ではあるが、そこに見たものは姉シャーロットのブラッセルに於けるエジエ氏に対する切々たる思い、兄ブランウエルの家庭教師として働いたロビンソン邸での夫人に対する失恋、妹のひそやかな思いの中にある副牧師 Weightman 氏の突然の死などという、この世の愛の報われることなの

い悲しみだけであった。そしてこの世的な愛を信ずることの出来なかった彼女も精神面に於いてはかくも強烈な愛を描いたのは、彼女のもつ精神面の若さの故であろうか、人も驚く程の純真な愛を描いたのであった。

The passion of Catherine and Heathcliff is too simple and undeviating in its intensity, too uncomplex, for us to find in it any echo of practical social reality.⁽²²⁾

(キャサリンとヒースクリフの激情は余りにも純真なもので、その強烈さに於いては余りにも激しく、又余りにも一すじでありこの世でそうした類似のものを見い出そうとしても無理である。)と Dorothy Van Ghent は述べ、又更に

the astonishingly ravenous and possessive, perfectly amoral love of Catherine and Heathcliff belongs to that realm of the imagination where myths are created.⁽²³⁾

(驚くほど貪欲な独占欲の強い完全に道徳観念の少いキャサリンとヒースクリフの愛は神話がつくり出されるような想像の世界のものだけである。)とも結んでいるのである。

現世に於いては結ばれることなく、墓の下に於いてのみ愛は結ばれるものであるとのエミリーの思想をもった詩を引用しておこう。

Cold in the earth—and deep snow piled above thee,
Far, far, removed, cold in the dreary grave.
Have I forgot, my only Love, to love thee,
Severed at last by Time's all-severing wave?
No later light has lightened up my heaven,
No second morn has ever shone for me
All my life's bliss from thy dear life was given,
All my life's bliss is in the grave with thee.⁽²⁴⁾

(土の中は寒く、墓の上に深い雪も降り積る、遠く離れ、佗びしい墓の中に冷くいます君を私が忘れたことがあるだろうか。

唯一人の愛する方よ。

時の流れによってついには分けへだてられ

離れ離れにされてしまったあなたを
 愛することを忘れることがあるだろうか、
 決してありはしない。
 もう光はわが世界にはささず、
 次の朝も私には明けはしない。
 我が^{いのち}生命の祝福は総べて^{なれ}汝より与えられ、
 我が^{いのち}生命の祝福はすべて
 汝と^{なれ}共に墓の下にのみあり。)

3) アン・ブロンテ

三人姉妹の一番末の娘アンはどうなのであろうか。母の愛に触れるチャノスの少かった上二人に比べ赤坊の時から叔母ブランウエルに愛されて成長したアンは柔和さに満ちている。三人姉妹とも真実な作家であるが、その真実の表明の仕方も三人三様であって、姉シャーロットには山気があり、エミリーには燃えるような情熱が伴い、そしてアンにはやさしさが溢れている。彼女の表明する愛は誠に謙虚な純なものである。彼女は隣人に対する愛にしても深い同情心に満ち誠に信仰深い女性であった。

Winifred Gerin は “*Anne Brontë*” “*A Biography*” に於いて次のように述べている。

For the girl she had now become, deeply sentimental, tender-hearted to excess, poetical in all the outpourings of a spirit daily more attuned to beauty.⁽²⁵⁾

(今や彼女は少女となり深く情緒的で、過度な迄にやさしい心の持主で、すべて精神の発露に於いては詩的であり、日々美に対しては美しく調和していた。)

As a young girl Anne's favorite reading was undoubtedly poetry.⁽²⁶⁾

Gerin も述べる如く (若い少女として当然詩を好んで読んだ) とあるが成長しては彼女自らも詩を書くに至った。その詩も信仰的な態度がにじみ

出ている。

Light cannot fill the craving eye,
Nor riches half our wants supply,
Pleasure but doubles future pain,
And joy brings sorrow in her train.⁽²⁷⁾

(光は我々の貪欲な眼を充たしては呉れぬ、
富も我々の願望の半ばも満たしては呉れぬ。
楽しみは未来の苦痛を増すばかり、
歓びには悲しみが伴う。)

Enjoy the blessings Heaven bestows,
Assist his friends, forgive his foes.
Trust God, and keep his statutes still,
Upright and firm, through good and ill.⁽²⁸⁾

(神の与え給う祝福を味い
友を助け、敵を許せよ。
神の義を信じ、神の義を守り
善にも悪にも真すぐにしっかり立てよ。)

Thank for all that God has given
Fixing his firmest hopes on heaven,
Knowing that earthly joys decay,
But hoping through the darkest day.⁽²⁹⁾

(神の与え給うものに総べて感謝し、
強い希望を天に向け
この世の歓びは朽ちる事を知り
暗き時代にありても、なお望みを持って。)
いささか説教くさい詩ではあるが、アンは自分の信条をはっきり述べず
には居られなかった。

さて、このアンの小説 *Agnes Grey* を見るならば、このような信条は小説の諸々に現われているが、彼女が愛をどのように表現したかを見ていくことにしよう。

姉シャーロットが家庭教師に家を出て、アンも亦家庭教師として、スカーボロのロビンソン家に出むいている。この小説は彼女の家庭教師の生活を描いた自叙伝的なものであり、ここでも冒頭に述べるのは自分の経験を述べるのは、人さまへの教訓となるだろうとアンらしいところが顔を出している。

In neither Emily nor Anne would rhetorical passages, such as abound in Charlotte's books, ever be found.⁽³⁰⁾

(エミリーに於いても、アンに於いても姉シャーロットが豊富に用いた^{フンゲン}修辭的な用語は見当らない。)

Anne achieved a distinct style of her own—always fresh and lucid, very often sparkling,...⁽³¹⁾

(アンは独特の文章スタイルを完成し—それは常に新鮮で明解、屢々澄んだ輝きがあった。)と Gerin も賞讃している程の文である。

このアグネス、グレーの中で述べられる辛い家庭教師の生活の中に忽然として現われその生活の上に宵の明星のように輝くのは副牧師 Weston 氏であるが、これはブロンテの父パトリックの牧する教会の副牧師 Weightman 氏をモデルにしたものだろうと考えられている。幾人か入れ替った副牧師達に対して姉妹は辛辣な批判の眼を向けていたようであるが、この青年に対してだけは満更でもなかったようである。特にアンは心から彼に深い思慕の念をよせて居り、又青年の方も礼拝中向いの席からじっと彼女に熱い視線を送っていたと言われている。だがそれに対してアンは、じつとうつ向いたまま、その視線に答えようとしなかったのは、姉達への遠慮からだっか、又は彼女の控え目な性格から来たのかも知れない。

それだけに『アグネス、グレー』に現われるグレー嬢のウエスト氏に対する愛は慎しみ深い乍らも歓びに溢れたものである。

家庭教師をしている家でのお嬢さま達のお伴をして教会へと出かけるのもアグネスの務めであった。

One such occasion I particularly well remember: it was a lovely afternoon about the close of March. Mr. Green and his sisters had sent their

carriage back empty, in order to enjoy the bright sunshine and balm air in a sociable walk home along with their visitors. The Misses Murray who, of course, contrived to join them. Such a party was highly agreeable.⁽³²⁾

(そのような場合の一つを私はよく覚えて居ります。三月も終りの明るい午後の事でした。グリーン様の御姉妹たちは御自分達の馬車を返えしてしまわれ、お客さま方と一緒にブラブラ話し乍ら、歩いて明るい日の光とさわやかな空気を楽しもうとなさいました。マーレー嬢たちも勿論これに加わろうとなさいました。このようなお仲間はロザリー嬢も大好きなものでいらっしゃいます。) そうした賑やかな仲間を好まないアグネスは一人故郷のなつかしい花はないかしらとあたりを探し、やっと堤の上に桜草を探し出す。だが手がとどかない。

I was startled by the words, "Allow me to gather them for you, Miss Grey," spoken by the grave, low tones of a well-known voice. Immediately the flowers were gathered, and in my hand. It was Mr. Weston, of course, —who else would trouble himself to do so much for me?⁽³³⁾

(「グレーさん、取って差し上げましょうか」という落ち着いた低い調子の聞き慣れた声で話しかけられ、私はびっくりしました。すぐに花を摘んで私の手に下さいました。勿論ウエストンさんです。外の誰が私の為になんかこんなに骨を折って下さることがあるでしょうか。)

大変素直な歡びに溢れた書き方である。

It seemed to me, at that moment, as if this were a remarkable instance of his good-nature, an act of kindness which I could not repay, but never should forget,⁽³⁴⁾

(この瞬間、これはこの方のととてもよい性格と親切を示すものだと私は思いました。何らお返しは出来ませんが私は忘れることは出来ないでしょう。)

正直に表明された思いである。

このアグネスの歡びも束の間で、お嬢さまのロザリーから横取りされようとするが、アンはエミリーのようにエゴイシックな主人公キャサリンを描くようなこともしないし、又姉シャーロットのように愛の受け入れら

れぬ悲しみを描こうともしない。唯ひたすらに諦めようと努力する。

‘it is not the man, it is his goodness that I love.’⁽³⁵⁾

(彼自身に惹かれているのではないわ。彼の善良さに惹かれているのだわ。)と自分に言いきかせる。

男性の前で自由自在に媚を振舞うマーレー嬢に比べ、控え目なアグネスは何も自己表示が出来ない。羨しく思いつつも、その様な真似は出来ない。だが自分の楽しみの為だけに相手を魅惑して暫くを満足しようとするような富める娘の肩を持つことは断じて出来ない。ここにも作者アンの正義感が顔を出して、

‘O God, avert it’ I cried, internally—‘for his sake, not for mine’⁽³⁶⁾

と叫ぶ、(私は心の中で呼びました。「おお、神さま。あの方がそんな交際を避けて下さいますように。私の為にはありません。あの方の為にならないのです。)憐れみに満ちたアンの心が読みとれる。

この物語は迂余曲折ののちに遂に二人は結婚して模範的な幸福な家庭をつくることになっているが、これはアンの果さなかった愛を小説の中で夢の実現として表明したのであろう。Weightman は兄ブランウエルとも大変仲がよく明快な青年であったが、コレラの為に急逝してしまった。アンの悲しみの程も想像出来るところである。

こうした中にも細々とした愛のかなしみ、女心の機微を描いているのは面白い。二、三を拾ってみよう。

but there I read a meaning that kindled in my heart a bright flame of hope than had ever yet arisen.⁽³⁷⁾

(私はその中に今迄覚えたことのないような希望の輝きを心の中に読み取ったのでした。)

相手が愛して呉れているのだと感じる時の女の喜び。

for my inward happiness made that amusing, which would have wounded me at another time.⁽³⁸⁾

(私は心の中で喜びに溢れていましたので、マーレー嬢のひどい言葉も別の時なら腹立たしく思ったでしょうが、気軽にきき流すことが出来まし

た。)愛されている者の幸福を述べている。雨の日教会帰えりに、ウェストン氏がそっと傘をさしかけてくれた時のことである。「傘が要るなら下男に持たせているのに」とマーレー嬢に皮肉られた。でも、アグネスは気にしなかった。

It made me think my hopes were not entirely the offspring of my wishes and imagination.⁽³⁹⁾

彼の一寸した表情親切な行為は本当の彼の気持を示すもので(『私の希望的な考えでもなければ、私の一人よがりの思いあがりの結果でも全々ないわ』と考えようと思いました。)

If the mind be but well cultivated, and the heart well disposed, no one ever cares for the exterior.⁽⁴⁰⁾

お嬢さまの容姿にはとても叶わない。(だが頭脳さえ磨いていれば、そして心が美しかったら、誰も外の容姿など気にしないわ。)と気負う処など女心をよく表明し、

I paid more attention to dress than ever I had done before.⁽⁴¹⁾

(それからの私は以前にも増して、服に気をつけるようになりました。)と如何にも女らしい。

Courage, pride and independence, characteristics of all three.⁽⁴²⁾

(勇気、誇り、独立心と言ったものは、この三人姉妹の共通に持ち合わせた特長である。)と Gerin も評しているのであるが、この似かよったものを持つ三人がそれぞれ愛の表明の仕方にかくも個性が見られるのは、なかなか興味深い事実である。

No one could call Anne Brontë's two novels masterpieces; but she deserves neither to be ignored, nor to be regarded only as a pale copy of her sisters⁽⁴³⁾

W.A. Craik は *The Brontë Novels* に於いて、

(誰もアン、ブロンテの二つの小説を傑作ということは出来ないだろうが、だがアンの小説は無視すべき程の小説でもなく、又姉たちの小説の色あせたものまねだというべきものでもない。)

と評しているのであるが、(as the first novel writer of the family.) それほど
 ころか一番先に小説を書き始めたのはアンであると言っているのである。
 そして独自の味、雰囲気を出した小説家と考えられている。注目に値し、
 独創的でよき作品である。

a novelist in her own right with a mode and flavour of her own—
 worthy of attention, original and good.⁽⁴⁴⁾

註

- | | | | |
|------|--|--------------------------------|-----------------------------------|
| (1) | Biographical Notice of Ellis and Acton Bell | Charlotte Brontë | |
| (2) | <i>The Brontë, Fact and Fiction</i> | Mackay Arms | |
| | Press | New Yorkp. | p.43 |
| (3) | " | " | p.16 |
| (4) | <i>Shirley</i> | Charlotte Brontë | Harper Brothers Publishers London |
| | | | p.19 |
| (5) | " | " | p.191 |
| (6) | " | " | p.191 |
| (7) | " | " | p.99 |
| (8) | <i>Poems, The Brontë Sisters</i> | E.P. Publishing LTD. | p.36 |
| (9) | <i>The Brontë</i> | | p.38 |
| (10) | " | " | p.41 |
| (11) | <i>Emily Brontë</i> | Winifred Gerin | Clarendon Press, Oxford |
| | | | p.106 |
| (12) | <i>The Complete Poems of Emily Jane Brontë</i> | Hatfield Columbia | |
| | University Press | | p.163 |
| (13) | <i>Emily Brontë</i> | | p.190 |
| (14) | " | " | p.253 |
| (15) | " | " | p.190 |
| (16) | " | " | p.253 |
| (17) | " | " | p.254 |
| (18) | " | " | p.246 |
| (19) | <i>A Wuthering Heights Handbook</i> | Lettis and Morres | p.89 |
| (20) | <i>Wuthering Heights</i> | Emily Brontë | Oxford University Press |
| | | | p.99 |
| (21) | <i>A Wuthering Heights Handbook</i> | | p.87 |
| (22) | <i>On Wuthering Heights</i> | Dorothy Van Ghent (A Wuthering | |
| | Heights Handbook) | | p.125 |
| (23) | " | " | p.127 |
| (24) | <i>A Complete Poems of E.J. Brontë</i> | | p.22 |
| (25) | <i>Anne Brontë</i> | Winifred Gerin, Allen Lane | p.77 |

(26)	"	"		p.73
(27)	"	"		"
(28)	"	"		"
(29)	"	"		"
(30)	"	"		p.72
(31)	"	"		p.73
(32)	<i>Agnes Grey</i>	Anne Brontë	Thomas Cautley Newby Publisher	p.462
(33)	"	"		p.463
(34)	"	"		"
(35)	"	"		p.489
(36)	"	"		"
(37)	"	"		p.491
(38)	"	"		"
(39)	"	"		p.495
(40)	"	"		p.493
(41)	<i>Agnes Grey</i>			p.76
(42)	<i>The Brontë Novels</i>	W.A. Craik	Methen and Co. LTD. London	p.202
(43)	"	"		"